像て造りたまふたのみならず、我等の救靈の爲め、御獨子を地上に降し、我等の罪を購ふ爲め、三十三年の間、艱難を嘗め、終に最も慘酷なる苦みを忍び、十字架の上に死したまふまでに至らしめ、尙ほ其の上に聖體の秘蹟に於て、之れを我等に殘し、我等の糧と成り、我等の需用に應じて、靈魂の扶助と成らしめたまふ程である。

此の愛を斯く完全ならしめ、又た四方八方より

見て、斯く珍らしく成らしめたる、解すべからざる特質を、能く注意して考へよ。

第一、何時の時代から、神は我等を愛したまふたかを考ふれば、神の愛は神の本性と同く、始も終もなくして、永遠なるものである。蓋し凡ての時代以前より、其の全知なる攝理の中に、聖子を我等に與へて下さる事は、決定られたのである。

我等は之れを考へて喜びに耐えず、斯う申上げ

ねばならぬ「天の大御神は、斯の如く初なき時より我れを思ひ、我れを重んじ、云ふに云はれぬ寵を以て、我れを愛し、且つ其の獨子を我れに與へて、我れの糧とならしめん事を添なくも望みたまへり」と。

第二、凡て他の愛は何ほど激しくても、限があつて、夫れを越える事は出來ぬ、唯だ神の愛のみは限がない。

神の愛の全く滿足せしは、天に在す聖父が、御自分と等き威稜、均き無限、且つ同一體、同一性なる聖子を、我等に與へて下さるを以てのみであつた、故に賜は愛ほど大なるものであつて、兩方とも到底人智を以て、測り知る事は出來ぬ程である。

第三、神が我等を愛したまふのは、必要の爲めでもなければ、強いられたのでもない、神が斯く

解しがたき程の寵を以て、我等を愛したまふのは、唯だ全善なるによつてゞある。

第四、我等に於ては、天主が斯の如き過度の愛を以て、卑さ我等を引揚げたまふに至らしむべき、善業や手柄は、何もなかつたのである、唯だ神の寛仁なる聖意によつてのみ、斯く取るにも足らぬ我等に、御自分を與へて下さるやうに成つたのである。

第五、此の神の愛の純粋な事を考へて見れば、世間の愛情の如く、自己の利益などの念は、少しも雑つて居らぬ。天主は我等の物を聊かも要したまはず、獨り自らでは全く幸福にして、其の光榮は限なし、故に其の得も云はれぬ善良、其の愛ばかりで、心を傾けたまふやうに成つたので、利害の念などは露ほどもなく、唯だ我等の爲のみを圖りたまふのである。

斯の如き事を確く信じて、心の中に斯う云はねばならぬ。「如何にして斯くも高く大なる神が、斯くも賤しき人間に、心を掛けたまふたか、嗚呼光榮の王、塵埃に過ぎぬ我れに何を欲し、何を求めたまふや、」主の熱誠なる寵に照され、斯くしたまへるは、主の目的の唯一なるを認む、其の目的は、主の純粹なる愛によつて、爭ふべからざるやうに之れを覺る、即ち主は斯く自ら我が糧と成り、

我が分と成りたまへるは、我れを主に變ぜしめん爲めのみ、主は我れを要したまはざれども、主我れに生きたまひ、我れ主に生きて、愛によつて主に合體し、我れを主と一致せしむる事を思召たまふ、然り、主は我が賤しき塵埃の心を感化せしめて、主の心と共に神聖なる一心とならしめん事を望みたまへり」と。

我等は斯くまで神より大切にせられ、寵愛せられ

たるを見て、我等の心は感嘆して歡喜に耐えず、又た神が其の愛の全能なる力を用ひたまふたのは、全く我等の心を得て、先づ我等を凡ての被造物より引離し、次に賤しき自己より引離さん爲めである事を認むるであらう。其の時は我等を全く主に犧牲に供して、以後は何時までも、我等の智識、意思、記憶、及び五官に至るまで、唯だ其の愛と聖意とにのみ司られるやうに、之れを捧げ

ねばならぬ。

次に聖體の秘蹟を適當に拜領するのは、我等に斯の如き神聖の好果を生ぜしむる、唯一の道である事を知るであらう。此の時には之れに心を注いで、投詞、又は愛情より出づる祈禱を以て、迎へねばならぬ、例令ば「嗚呼、天の糧よ、何時になつて、我れは主の愛の火を以てのみ、身を犧牲に供するを得べきや、嗚呼、限りなき寵よ、其の

時は何時到來すべきや。

「嗚呼、活る麵麭よ、何時になれば、我れ唯だ汝により、汝を以て、又た汝の爲めにのみ、活るを得べきや、嗚呼、我が生命、我が美德、我が歡喜、及び我が永遠の幸福なるものかな。

「嗚呼、天のマンナよ、何時になつて、我れ地上の糧に飽き、汝のみを望み、汝の本體のみを以て、我が糧の爲すを得べきや、嗚呼、愛の神、全能の

神なる主よ、願くは今我が淺ましき心より、凡て地上の愛着、邪慾を拔去り、主の德を以て、之れを飾り、之れを清めて、何事も唯だ主の聖意に適ふ爲めのみに爲る事を欲せしめたまへ、然らば我が心を主に開き、主の之れに入りたまはん事を願ひ、强て主を入らしめ、主が何時も結ばせんと欲したまへる好果を、主の聖意のまに〳〵生ぜしめたまはん。

此の愛情を籠めたる感念は、聖體拜領の前夜にも、又た其の當日にも、之れに對する好き準備をするに、益になるであらう。

愈よ拜領の時刻が來たならば、今や我等の拜領せんとする御方は、如何なる御方なるかを考へよ。

是は神の聖子にして、測られざる威稜の神である、其の尊前に於ては、上天に勢力あるものであるから、皆な恐れ慄くのである。

此は聖の聖なるものにして、曇なき鏡、清淨潔白にして、之れに比ぶれば、凡ての被造物の如きは、何れも穢れざるものなし。

然るに此の御方が、此の世に於て虫の如く、捨物の如くに、取扱はれる事を厭ひたまはず、我等を愛するにより、自ら謙て、猛惡非道なる人々に排斥せられ、蹂躙られ、嘲弄せられ、唾を吐掛けられ、遂に十字架に釘けられて、死するを厭ひた

まはなかつた。

故に我等が目下拜領せんとする所のものは、全世界の生と死とを、掌にしたまふ御ものである。

然るに我等は如何なるものであるか、我等自己は全く虚無に過ぎぬ、我等は罪を以て、又た惡き心によつて、最も賤しきもの、無知の動物にも劣つたもので、辱しめらるべきもの、惡魔の翻弄物と成るべき筈のものである。

斯く全能全善なる神の寵、又た譬やうなき大恩に報ゆるに、我儘勝手ばかりにして、斯る恩者を輕蔑し、其の尊き聖血を踏付けたのである。

夫れにも拘はらず、神は斯の如き恩知らずの我等を愛し續けて、其の全善を變ずる事なく、尚ほ聖體を拜領するに招きて、之れを領けざれば命なしとて、是非ともと招きたまふ。我等は實に淺ましと極るものにして、種々の欠點を負へども、神

は尚ほ聖顔を反けたまはず、聖意の戸を閉たまはず、然るに神の我等に求めたまふ所のものは、唯だ左の事のみである。

第一、神に背いたのを眞實に悔む事。

第二、如何なる種類のものと雖も、罪ならば凡て皆な此の上もなく之れを忌嫌ふ事。

第三、神は我等が服從を以て、其の聖意に身を全く献げて、心の中には絶えず、之れを犧牲に献げ、外部にては機會のある度毎に献ぐる事を望みたまふ。

第四、神は又た我等が強き望を以て、神は屹度我等を赦し、我等を清め、又た我等を凡ての敵より、扶けんとの思召であると、固く信じ深く頼む事を求めたまふ。

我等は斯の得も云はれぬ神の愛に強められ、聖體を拜領せんとて之れに近き、恐れながら愛と信

心とを以て、斯う申上げるが宜い。

「主よ我れは斯くまで多く、斯くまで重く主に背き奉りて、未だ適當の贖を爲さゞるに、爭で主を拜領するを得べき、尙ほ又た小罪に就て、未だ心は全く其の愛着を脫せざるにより、主を領くるに耐えざるなり。我れ未だ身を全く主の愛、又た聖意に呈すべき服從に委ねざるにより、主を領くるに足らず、嗚呼全能全善なる神よ、主の最上

の仁愛を以て、又た聖言の力を以て、我れを適當の身とならしめたまへ、相應の信仰を以て、主を拜領するを得せしめたまへ」と。

聖體拜領後は直に、我が心の奥に潛み入り、世の萬事を打忌れ、神に向て斯う申上げねばならぬ。

嗚呼全能なる天の大王、斯く貧しく淺ましく明盲目にして、一の善もなき我が身に、主を降らしめたまひしは是れ何者ぞ」と、此の時「蓋は愛な

り」との答へがあるであらう。

乃で我等は語を繼ぎ「嗚呼無所造愛、溫良の極なる愛、汝は我れに何を求めんとするや」と、云へば答へて、斯う云はれるであらう「我れ唯だ汝の愛をのみ求む、我れは汝の心の祭壇に於て、汝の凡て献身的事業に於て、我れを愛する火より外には、何等の火もなからん事を望む、我れは此の愛が、凡て他の愛を燒盡し、汝の我意をも燒盡さ

ん事を望む、其の時に初めて汝は我が前に、眞に芳しき香ある犧牲を捧ぐるものとなるべし。

是れぞ我が汝に絶えず求め來りしもの、尙ほ今後も恒に之れを求めん、何となれば我れは全く汝のものとなり、汝は亦た全く我がものたらん事を欲すればなり、然れども我れ汝に告ぐ、汝の意志が全く我が意志に適合せざる間は、また汝が自愛心や、自然の傾向や、我意や、世間の譽などに愛

着して居る間は、我がものたるを得ざらん。

我れは汝に己目を忌嫌はん事を求む、然すれば我れは其の代に、我が愛を汝に與へん、我れは汝の心が我が心と一ならん事を望む、何となれば是れが爲めに十字架に釘けられ、鎗を以て貫かれたればなり、我れは繰返して云ふ、我れ全く汝のものとならんには、汝も亦た全く我がものとならん事を望む、汝は我れの限なく價値あるものなるを

知れり。然るに我れは汝に對する慈愛を以て、汝の賤しき身分までに謙れり。故に今我れを求めよ。我が愛するものよ、汝が我れに身を委ねさへすれば、我れも亦た汝に身を委ねん。

我が愛する子よ、我が汝に求むる所のものは、即ち我が欲する事の外、汝は何をも欲せず、我が思念、意志、見込の外、汝も亦た他に之れ有る事なく、我れのを以て、汝を司らしめんと欲す、

然すれば何も無き汝は、限なき我れに引込まれて、我れに變じ、而して汝は我れに於て、全く幸福にして、我れは汝に於て、全く滿足せんとす」と。

終に我等は永遠の聖父に、其の聖子を献げ、第一恩謝として之れを献げ、次に我等の需用の爲め、全聖會の需用の爲め、我等の親族、及び我が殊に爲めに祈るべき人々の需用の爲め、又た煉獄に苦む靈魂の爲めに、献げねばならぬ。之れを献ぐるのは、聖蘇基督が聖血を流し、十架字の祭壇に於て、御自分を自ら聖父に献げたまひし奉献を紀念して、之れに合さねばならぬ。

尙ほ又た斯の如き方法によつて、當日全世界の公聖會に於て、献げらるゝ凡ての聖祭、及び犧牲的事業を献ぐるが宜い。

第五十六章　精神的聖體拜領

聖體の秘蹟を拜領する事は、一日一度に限るの

であるが、精神的拜領は前にも述べた如く、一日の中に幾度も、何時でも出來るのである。此の尊き惠を缺かすのは、唯だ我等の怠慢とか、過失とかの外にはない。

時としては聖體の祕蹟を拜領するも、拜領するものゝ缺點によつて、利益の少い事があるゆゑ、場合によつては、精神的拜領の方が、却て一層利益と成り、神の聖意にも適ふ事がある。

故に我等は此の拜領の準備せんとする度毎に、必ず神の聖子が御自分の手を以て、自ら我等を精神的に、養ふて下さるに相違ないと確信せねばならぬ。

我等が能く此の準備するには、先づ此の志を以て、我等の精神を神に上げ、一寸我等の過失を顧みて、之れが後悔の念を表し、次に謙遜と信仰との深き情を以て主に祈り、主が我等の憫然な靈

魂を見舞ふて下され、新に恩寵を齎して我等を癒し、且つ我等を敵に對して、強めて下さるやうに願はねばならぬ。

或は又た我等が己れを制して、何かの情慾を懲し、若くは何かの德行を爲すべき時には、此等の事を皆な悉く、我等の心を求めたまふ神に對して、之れを準備する心組を以て行はねばならぬ。而して神に向ひ、一心に之れを招き、其の恩寵を

以て我等の心に來り、我等を癒し、我等の敵を防ぎ、獨り我が心を司りたまはん事を願はねばならぬ。

或は又た此の前の、秘蹟的拜領を思出して、心の底より斯く祈つても宜い。

「嗚呼救主、何時復主を拜領する時きたるべきや、何時該幸福を得べきや」と。

若し又た尙ほ一層の注意を以て、精神的拜領の

準備をせんと思ふならば、之れを行はんとする前日の晩方から、我等の爲すべき凡ての克己の業、徳行、善業等を、此の目的に當嵌るが宜い。

又た翌日は早朝より、聖體の秘蹟を適當に拜領するのは、靈魂に取りて如何なる利益、如何なる幸福であるかを考へよ。蓋し聖體拜領を以て、失ふて居つた徳を再び得、靈魂に原の美を復し、神の聖子の受難の効果と、功力とに與る事が出來る

のである、終に神は我等が聖體を領け奉る事と其の凡ての恩惠を戴く事とを、如何に喜びたまふかを考へ、神の聖意に適はん爲めに、之れを拜領する熱き望を以て、心を燃すやうに爲ねばならぬ。

我等が此の望を覺ゆれば、心を聖蘇基督に上げて、斯う申上げるが宜い。

「主よ、我れ今日秘蹟的に主を拜領し得ざるによ

り、精神的の道によつて、毎日毎時適當に主を拜領するを得せしめたまへ。嗚呼全能全善なる主よ、我が凡ての罪を赦して、我れを癒したまへ。又た新に恩寵を賜ひ、我が凡ての敵、殊に聖意に適ふ爲め、現に今戰ひつゝある敵に、打勝つ力を與へたまへ」と。

第五十七章　感謝の事。

凡て我等の有てるもの、及び行ふ所の善事は、

悉く神のものにして、神より出づるものであるから、我等の求め得た成功や勝利の爲め、又た我等が慈悲の聖手より戴ける一般の、或は特別の恩惠の爲めに、感謝するのは、義の當然の事である。適當に之れを盡さんが爲めには、神が我等に其の恩寵を與へて下さる目的を考へるが宜い。能く之れを考ふれば、如何やうに感謝すべきかを、知る事が出來るのである。

神が凡て我等に恩惠を下したまふ目的は、先づ其の光榮を計り、次に我等が神に愛敬奉仕するのを望みたまふのである。乃で我等は之れを考へつゝ、斯う心得ねばならぬ「此の恩惠、此の恩寵を、斯く寛大に賜はりしは、神に於て如何に全能、全知、全善の業なる哉」と。

それから我等自身を顧れば、何等の恩惠をも受くべき身にあらずして、唯だ恩を忘れ、過失の

ありがちなるを以て、深く謙り、主に斯う申上げるが宜い「我が神よ、主は如何にして、斯く賤しきものに、目を懸けたまひ、斯くも大なる恩惠を下したまふや、主の聖名は、千代に八千代に、尊ばれたまへかし」と。

終に神が其の恩惠の代りとして、我等に愛敬奉仕するを求めたまふ事を心得、斯く慈悲なる神に對すべき愛、又た求めたまふまに〳〵、之れに仕

へ奉る眞實の望を惹起さねばならぬ。

我等は此の目的を以て、我が身を全く神に献げねばならぬ。身を献ぐる方法を次の章に示さう。

第五十八章　身を献る法

神に己れを献るを以て、神の聖意に適はん爲めに、必要なる條件二個あり。第一耶蘇基督が自らの聖父に爲したまふた凡ての献と一致同心して之れを爲さねばならぬ。第二我等の意志が、全く

世間の愛着心を離れて居らねばならぬ。

第一の條件に就ては、聖子が此の涙の谷に御住居あそばされた間は、御自身と其の凡ての事業とを、天に在す聖父に捧げたまふたばかりでなく、尚ほ其の上に、我等の身と其の凡ての事業とをも、捧げたまふた事を心得て、我等の凡ての献は、基督の献に合さねばならぬ事が分る、蓋し基督の献によつて、我等の献が聖意に適ふのである。

第二の條件を行はんが爲めには、神に身を献るに先ちて、我等の意志が地上の物に、愛着して居らぬかと、考へて見ねばならぬ。若し然うと見たならば。先づ心より之れを拔去らねばならぬが、之れを拔去るには、神の扶助を賴み、而して何の羈もなく自由のものとなつて、神の威稜に身を献る事の出來るやうに、願はねばならぬ。

夫れのみならず、若し我等が、何か世間的の愛

着心を持ちながら、神に身を獻るならば、是は我が物を獻るのではなくして、他の物を獻るに當るのである。何故ならば、心を他の物に奪はれて居れば、己がものではない、他のものに屬するからである。他に屬するものを獻れば、我が物ながら我が物ではないから、眞面目の獻とは云はれぬ。斯う云ふ心持で、何樣して神の聖意に適ふ事が出來やうか。

此の缺點があるから、度々我等が神に身を獻げても、其の獻は遂に無駄に成り、何の功もなくして、我等が自ら獻げたにも拘らず、尙ほ罪に陷るのは、之れが爲めである。

併しながら我等が、多少世間的愛着心を覺えても、神に身を捧ぐる事は出來るが、夫れには一の條件がある。即ち我等は其の時に、慈悲なる神に此の愛着心から追れさして貰ひ、身を全く神の威

稜に献げて、奉仕の道に從事する事の、出來るやうに願はねばならぬ。此の通りにして度々、愛敬を以て身を献ぐるのは、我等に取りて一の義務とも云ふべきものである。

故に我等が身を献ぐるには、聊かも己れの利益を思はず、我意を脫し、地上の幸福も天國の快樂も、之れを見込にしてはならぬ。唯だ神の聖意と、其の攝理とにのみ導かれて、之ればかりに歸服し、

不斷の犧牲として、之れに身を献げ、凡て被造物に對する愛着心を、拔去らねばならぬのである。其の時に斯う申上ぐるが宜い「主なる我が造主よ、我れは身を全く主の聖意と、其の永遠の攝理の聖手に委ね奉る、願くは生死とも、聖意のまに〳〵我れを計ひたまへ、死後にても此の世に於て、又た永遠の命に於て、身を任せ奉る」と。

斯く神に身を委ぬる事が、眞實なるや否やは、

困難の時にこそ之れを認むるなれ。其の時に我等は、前に世間的人であつたのに、福音的人となつて、完全な幸福を見出すであらう。何故ならば我等は神の有と成り、神も亦た我等の有と成りたまふからである。然るに神が御自分を與へたまふのは、唯だ被造物をも、自己をも見棄て、全く神の威稜に對して、身を犧牲に供する人々に限ると云ふ事を心得ねばならぬ。

此に於て乎、我等は凡ての敵に打勝つ爲め、極めて力ある方法を得るのである。何故ならば我等が神に身を献げ、神と一致して、一のものと成る事が出來た以上は、如何なる敵、如何なる力が、我等を害する事が出來やうか。

我等が神に何歟の善業、假令ば斷食、祈禱、又は他の敬虔の業を、献げんとする時に當り、先づ耶蘇基督が御在世の砌、斯々の業を聖父に献げた

まふたと云ふ事を考へ、此の神たるものゝ業の、功勳と功德とを頼にし、己が業を之れに献ぐるが宜い。

乃て我等が神に對すべき事を盡すが爲めに、耶蘇基督の業を、聖父に犧ぐる方法を述ぶれば斯うである。

先づ前に我が身の罪科を一般に、或は別々に見渡し、到底自己では、神の怒を宥め、其の正義に

充分の償を爲す事は出來ぬと認めて、神の聖子の御牛涯、及び御受難を記憶し、之れに賴まねばならぬ。又た神たる救主の爲したまふた業、假令ば其の斷食、祈禱、堪忍、若くは血を流したまふた事などを考へ。之れを覺えて、此等の業を爲したまふたのは、殊更我等の爲め聖父の怒を宥め、其の恩惠を求め、又た我等の罪の債を贖ふ爲めであると云ふ事を考へ、主耶蘇基督が聖父に向て、

斯う仰せられるやうに思はねばならぬ。「永遠の聖父よ、視よ我れ目下聖意のまに〳〵、就中斯々の人の罪と債の爲め、聖父の正義に十二分の償を献げんとす、願くは聖父の威稜、彼れを赦して、撰民の列に加へたまはん事を」と。

我等は此の聖子の献げ、及び祈禱は、己れの爲めにせられたと思ひ、之れを天に在す聖父に赦げ、其の功德によつて罪を悉く赦されん事を、切に

願はねばならぬ。

此の方法は、基督御生涯の各玄義に就ても、又た其の玄義の各場合に就ても、用ふる事が出來る。が之れを己れの爲めに用ふると同時に、又た他人の爲めに用ふるを忘れてはならぬ。

第五十九章　感情的信心及び神の道に於る無感覺

感情的信心は、主に三個の原因から起る、即ち

人生と惡魔と聖寵とからである。其の中の何れより起つたかは、其の結果によつて知る事が出來る、若し感情的信心によつて、自分が一層善良なものにならぬならば、是れ恐らくは惡魔、若くは人性の結果であらう。而して其の信心によつて、身に覺ゆる誘引と甘味と愛着とが強いほど、又た己れを重んずるほど、其の原因が惡魔か、又は人性であると思はれる。

故に我等が心に、信心の感情的甘味を覺ゆる時には、好奇に其の原因が、何れにあるかを、調ぶるには及ばぬ。又た餘り夫れを頼にするな。尙ほ又た自己は何にもならぬと確信して、止めてはならぬ。却て注意に注意を加へ、益す已が弱きを頼まず、凡ての愛着心、彼の靈界に於る愛着心をも、離れるやうに力めて、唯だ神と其の聖意とのみを、求めねばならぬ。斯くすれば、我等の感情的信心

が、何れの原因から起つたにもせよ、假令人性、若くは惡魔の囮によるとも、夫れが却て我等の爲めに、聖寵に換るやうに成るであらう。

神の道に於る無感覺も、矢張感情的信心に就いて云ふた三個の原因から起る事がある。

惡魔が我等の心に、之れを起さす事がある。夫れは我等の心を、冷淡ならしめ、靈生的修業より遠ざけて、世間の輕佻浮薄の風と歡樂とに、誘引

せんとする爲めである。

我等の固有の性質、過失、世間的愛着心、怠慢等も、亦た、我等の靈魂の無感覺の、原因と成る事がある。

併しながら無感覺は、聖寵より出づる事もある、蓋し我等の神を目的とせずして、神に遠ざかるべき志し、及び世間的愛着心などに離れるやう、一層注意せよとの訓戒かも知れぬ。或は聖寵の目

的は多分、我等に有る丈の善は、悉く神より出づと、經驗的に覺らしめ、隨て神の賜を、一層大切にして、尙ほ謙遜と注意とを以て、之れを保存すべき事を、敎ふる爲めであらう。或は又は聖寵の目的は、我等をして已れ、及び靈生的快樂を解脫し、心が全く自由となつて、分配を好みたまはぬ天主に、殘す所なく身を委ね、一層深く天主の威稜に、契合せしめたいかも知れぬ。終に無感

覺は、神が我等の全力を盡し、聖寵を利用して戰ふ事を見るのを、喜びたまふによるかも知れぬ、其の時は神が故ら、我等の益に成る事を、專ら計ひたまふ譯である。

故に若し心が無感覺になると思ふた時には、我れと我が心に省て、感情的信心のなくなつたのは、如何なる過失に原因するかを、考へて見ねばならぬ。而して其の過失を勇ま敷攻擊せねばならぬのである。是は聖寵の感動を回復する爲めにあらずして、專ら神の聖意に適はぬ事を、遠ざける爲めである。

若も夫んな過失のある覺がなければ、直ぐ神の聖意に歸服して、以て感情的信心をば、眞正の信心たらしめねばならぬ。

兎角、如何にしても、又た如何なる口實の下にも我等の信心の業を打捨てゝはならぬ。幾干無益

無趣味に見えても、力めて之れを續け「神の愛ふかき思召によつて、無感覺の間に差出される苦き杯を、心よく飲まねばならぬ。

此の無感覺と同時に、眞暗黑のやうな事になつて、心は殆ど何方へ向いたら、何樣したら宜いか、分らぬ事もあるが、夫れでも驚くには及ばぬ。屹然として獨でも、十字架の上に止り、假令世間や萬物が慰藉を差出して來ても、地上の慰藉は避け

るが宜い。

心の苦を人には云はずして、唯だ指導者のみに之れを顯すが宜い、又た之れに語るにも、之れを和げたいとの目的ではなく、寧ろ尙ほ神の聖意に適ふが爲めに、如何やうにして之れを忍ぶべきかを、伺ふ爲めにせねばならぬ。

聖體拜領、祈禱、及び其の他の信心の業に、依賴せねばならぬが、夫れは十字架より下りる爲め

でなく、寧ろ力を得て、其の十字架の光榮を揚げ、之れに釘けられたる神に、尙ほ一層巨大なる光榮を歸する爲めである。

若し我等の心が亂れて、默想する事も、祈禱する事も、思ふやうに出來ぬ時は、出來るだけ之れを爲すが宜い。

智識を以て行ひ得られぬ事は、意志と言語とを以て、之れを行ふやうに爲ねばならぬ。心の中で

神に物を申上げたならば、必ず大なる利益を得て、心に力と勇氣とを求むるに相違ない。

然う云ふ場合には、斯う云ふても宜い、「嗚呼、我が靈魂は何故に悲めるや、何故に憂慮するや、神に希望せよ、何となれば、我れは始終之れを讃稱へん、我が救主にして、又た我が神なればなりと。又た「主よ何故に我れを遠ざかりたまふや、我れ主の扶助の必要なること斯く大にして、

困難に惱みつゝあるに、何故我れを退けたまふや、願くは何時までも、我れを棄てたまふ事なかれ」と。

神がトビヤの妻サラと云ふ者を愛し、故ら之れを困難に遭はしめ、之れに曰ひし慰藉の言語を思出して、自已に云はれるが如く、之れを利用して、口に出して云はん「凡て主を尊ぶ者は、困難の中に暮すならば、勝利の冠を受くること疑なし、

困難に遭へば必ず救出され、而して之れに羅れる罰は、慈悲に導く道とならん、主は決して我等の滅亡を歡びたまはず、嵐の後に平穏を來し、悲と涙との後には、心を樂ましめたまふ、嗚呼イスラエルの神よ、主の聖名は千代に八千代に尊ばれたまへかし」と。

尚ほ耶蘇基督が、橄欖山の園に於て、又た十字架の上に於て、其の感覺的の部にては、天に在す

聖父に見棄られ、大なる苦痛を感じたまふた事を思出し、我等の十字架を、基督と一致同心して忍びつゝ、心の底より「願くは主の聖旨の行はれん事を」と申上げねばならぬ。

斯く如くすれば、我等の堪忍と祈禱とによつて、我が犧牲の焔は、神の聖前にまで上がらん、我等の信心は、實際我等の心に留らん、何故なれば前にも述べた通り、眞正の信心は、十字架を擔ひな

がら、基督に從ひ奉らんとの、堅固なる神速なる心である。神に如何なる道から召されるとも、神の爲めに神を求め、時としては、神の爲めに神を殘すと云ふ事である。

靈生に從事する多くの人々でも、自己が進歩は、此の原理に基いてこそ圖るべく、決して感情的信心によつて圖るべきでないと云ふ事を、忘れ勝にして居る。若し此の事を能く心得たならば、自己

の心や惡魔に、欺かれる事も少からう。神が慈悲の深き攝理を以て、降したまふ困難に就て徒に、又た恩を知らぬものゝ如くに、嘆く事はあるまい。却て御自分の光榮と、人の利益の爲めに、萬事を計ひ、或は救したまふ神の威稜の奉仕に、尙ほ一層熱心を以て、身を委ねる筈である。

右の人々の陷る最う一個の迷がある。幾干恐怖と用心とによつて、罪の機會を避けると云ふても、

時々卑劣なる憎むべき、實に恐ろしき念、又は尙ほ一層憂愁想像を以て、惱まされる事がある。其の時に心を亂し、力を落して、自分は神から遠ざけられ、神に見捨られたやうに想像して、斯の如き念に罹つて居る靈魂の中には、神の靈が到底御逼留なさるとは思はれぬやうになる。

此の憐な人々は、斯る心事で大に氣を落し、殆ど失望に沈んで、凡ての信心の業を棄て、落膽の

境界に任せて了はうかと思ふ事がある。

彼等は神より受くる恩惠を辨へぬ。神が彼等を此の激き誘惑に罹らしめたまふのは、彼等をして自己を愈よ精く知るに至らしめん爲め、又た神の祐助の必要な事を、尙ほ一層確乎に認めて、神に數倍近寄らしめん爲めである。然れば神の限なき慈愛に對して、深く感謝すべきに、却て之れを呟くとは、彼等に於て、恩を知らぬ事と云はねばな

らぬ。

斯く如き場合に於て、我等の爲すべき事は、我等の中に認められる惡き傾向を深く考へ、神が之れを取除きたまはぬのは、我等の益であつて、我等が大なる罪に傾向つゝあるのを、知らしむる爲めである。我等は之れによつて深く謙り、而して聖寵の祐助がなければ、必ず深き淵に陷ると覺るに至らん、之れを覺れば希望に移らねばならぬ。

神は我等に危險を見せたまふたから、我等を祐ける思召であると信頼して、神は我等を祈禱と聖寵に依頼するとを以て、尙ほ近く御自分の側へ、引寄る思召であると考へねばならぬ。隨て斯の如き大なる慈愛の爲めには、如何にも感謝すべきものであると、覺らねばならぬのである。

兎も角も此等の誘惑や惡念を防ぐには、途方にくれる心を以て、之れに抵抗するよりは、寧ろ忍

耐して、天命に安んじて、又た巧妙に心を紛らして、以て之れを防ぐのが、易しいと確信するが宜い。

第六十章　糺明

糺明に於て考ふべきこと三個あり。第一當日の過失、第二其の機會、第三之れに打勝つ爲め又た之れと反對の德を求むる爲めに、なすべき決心これである。

當日の過失に就ては、本書の第廿七章に勸めた事を守らねばならぬ。

過失の機會となつたものを、認めた時には、之れを退け、再び來らぬやうに、力めねばならぬ。

之れを退ける爲めに、又た反對の德を求むる爲めには、堅固なる意志を要す、意志を堅固にする爲めには、已れに恃まず、神に信賴し、祈禱を勤めて罪を憎み、德を求むるやうに、始終注意せねばならぬ。

好く用心して、既に得た勝利、又た行ふた善業など夢にも誇らず、之れに餘り氣を止めぬが宜い。何故なれば虛榮、或は自慢の危險が、其所に潛んで、避けがたくなるからである。

故に凡て我等の行ふた善業は、之れを神の愛憐に委ねて了ふて、以後なすべき事が、尙々澤山あると思はねばならぬ。

當日神より受けた恩惠の爲めに、感謝すべき事に就ては、先づ神を萬善の源なりと認め、次に顯なる、若くは隱れたる、多くの敵より、我等を救ふて下さつた事を謝し、終に善念を起さしめられた事と德を行ふ機會を得せしめられた事と、知らず識らずの間に數多の恩惠を戴いた事との爲めに感謝の意を表せねばならぬ。

第六十一章　死するまで靈魂の敵と戰ふべし

心戰に必要の條件種々ある中に、第一のものは辛抱である。情慾は此の世に於て死する事なく、却て惡き草の如く、日々に殖えるものなるにより、之れを制する事を止めてはならぬ。

此の戰は生命と共にでなければ終らぬものであるから、何樣しても避けられぬ。此の戰を否めば虜となるか、死するかの外に道はない。

尙ほ又た我等の戰ふ敵は、何所までも頻に我等

を憎むにより、迚も平和や休戰を望む事は出來ぬ。夫れのみならず彼等は、和睦したいと思ふものを、一層激烈に擊つのである。

併しながら其の勢力や、員數に恐れるには及ばぬ、何故なれば、敗けたいものだけが、之れに敗けるのであるから。元來我等は大將たる神の光榮の爲めに、戰ふものなるにより、敵の力は神の勝手自儘になる、而して神は啻に我等の無理に强ら

れるを許したまはぬのみならず、武器を採て我等の爲めに防戰し、如何なる敵よりも强くして、我等さへ神と共に勇ましく戰ふ事を知りて、信賴を神の全能なる慈愛のみに置くならば、必ず我等に勝利を與へて下さるに相違ない。

神が假令我等の待ち望み居る如く、連に勝利を與へて下さらずとも、決して力を落してはならぬ。若し我等が戰の中に忠實にして、身を惜みさへせ

ねば、神は必ず我等に反抗するものを利益に變せしめ、我等の成効に最も直接の反抗を爲し、專らその成効を妨ぐるものをも、我等の利益と成らしめたまふに疑なし。之れを思ふは信頼を惹起すに、最も適當な事である。

故に我等は、世に勝て我等の爲めに死するまで、身を犧牲に供したまふた神たる大將の、跡を慕ふて行かねばならぬ。寛大の心を以て戰ひ、敵を

悉く亡して了うまで、武器を投じてはならぬ。敵を一人でも殘せば、我等に取りては眼前の霧の如く、横腹に突立し鎗の如くになりて、我等の欲する名譽の勝利を得る邪魔になる。

第六十二章　臨終の時に我等を襲撃する敵に反抗する準備法

人の生涯は、地上に於て止む時なき戰であるが、一番大切な時、勝負を決する時は、生より死に移

る臨終の時である。此の時に倒れるものは、再び起る道はない。

此の大切な時の準備として、我等の爲すべき事は、取りも直さず、今より與へられてある試の時の間に、勇ましく戰ふ事である、何故なれば、平生强敵に勇ましく戰ひ馴れたものは、最後の時に一層容易く勝利を得るからである。

又た度々死去に就て觀念するが宜い。然すれば

之れを眼前に見た時、恐怖の念が薄く、靈魂が其の時に尙ほ一層自由自在に成り、戰ふにも能く覺悟が出來る。世間の人は、死去の觀念を嫌ふて、之れを避けるが、其の理由は、被造物を利用して、得る所の快樂を、妨げる恐れがあるからである。彼等は之れに甚しく愛着して、其の熱中する事は、何時か之れに離れねばならぬと思ふだけでさへも、非常に苦勞になる程である。乃で其の邪な愛

情が薄らがぬばかりでなく、却て強く成り、生命に離別を告げて、其の重寶な珍物に離るべき時には、云ふに云はれぬほど苦痛を覺へ、又た其の苦痛は、快樂を極めた事が、長かつたら長かつたほど、夫れほど辛いのである。

我等が臨終の時の覺悟をする爲めに、致て宜い事が最う一個ある。夫れは自分一人で、助けて呉れるものもなく、今や現に死にかけて居るが如く

に、時々思ふ事である。其の時は、次の章に掲ぐる場合や、仔細を考へて看よ。我等は臨終の時に斯う云ふ場合に遭ふかも知れぬ。然れば次に敎ふる樂をも考へて、臨終の時に能く之れを用ふるやうに爲ねばならぬ。最後の時の打擊は、勝負の定まるものにして、一度に限るのであるから、其の時に誤れば取返しがならぬ。其の準備をする事は、何よりも最も大切である。

第六十三章　臨終の時に敵の起すべき四個の誘惑第一信仰に對ずる誘惑及び之れに反する法。

我が救靈の敵は、臨終の時に當り、常に重なる且つ殊に危險なる、四個の誘惑を起す、即ち信仰に反對する誘惑と、失望と虚榮と、又た惡魔が光明の天使の姿に變じて、起させる迷との四個である。

惡魔が虚僞の格言を以て、信仰に反する誘惑を差出す時は、我等が智識より意志に移りて、斯う云はねばならぬ「虚僞の父なるサタンよ、退け、我れは汝に聞く耳なし、我れは聖なる羅馬教會の、教ふる所のものにあらざれば、信ぜざらんとす」と。

誘惑の節には、信仰の觀念が、幾ら善く見えても、出來る丈け、之れに心を留めぬが宜い。惡魔

が我等を陷れる爲めに、設けた囮の如くに、之れを做さねばならぬ。

若し此の觀念が、我等の精神を支配して、幾ら力を盡して、之れを遠ざけやうとしても、叶はぬ時には、惡魔が我等に、確信せしめやうとして、理由を差出しても又た聖書の句を引證して來ても、屹立して之れに讓るな、此等を信用するな、何故なれば、其の句は幾千明白明瞭に見えても、

切々にして當嵌らず、曲解げて居るからである。

若し狡猾な蛇が、羅馬聖會は、何を信ずるかと尋ねたならば、之れに答えず、寧ろ彼れが如何に狡猾な心を以て、我等の言質を取らんと欲するかを考へ、尙ほ一層信仰を起すが宜い。若し敵を怒らせやうと思ふならば、羅馬聖會は眞理を信ずと答えるが宜い。若し又た惡魔が、其の眞理は何であるかと問ふたならば、其の眞理は即ち聖會の信

じて居る所のものよと答へるが宜い。

兎角我等の心を、十字架に釘けられたる基督と、蜜接に一致せしむるやうにして、斯う祈るべきである「我が造主、我が救主なる神よ、速に我れを助けたまへ、我れより遠ざかりたまはず、我れをして主の聖公會の信仰の眞理に逸れしむる事なかれ、同教會に入り主の子となりしは主の恩寵に歸すべきなり、主よ、主の光榮の爲めに、我をして

命の終るまで、絶えず之れに隨信するを得せしめたまへ」と。

第六十四章　失望の誘惑及び之れを防ぐ法。

臨終の時に、惡鹿が我等に打勝たんと務むる所の、第二の誘惑は、我等に罪を思出さしめて、恐怖を懷かしめ、失望の淵に沈ましめんとする事である。

斯る危險に際しては、次の原理を間違なきもの

として、始終保有たねばならぬ。即ち罪の紀念は聖寵より出でゝ、我等に謙遜と、神に背いた痛悔と、其の慈愛に對する信頼とを起さすならば、我等の救靈にも有益である。併しながら之れに反して、罪の紀念が我等の靈魂を錯亂と、不信頼と小膽とに入れんとする度毎に、又た我等が地獄に處罰さるべきものであると、確信せしむる爲めに、有らゆる理由を擧げて、最早救靈を得る見込がな

いと云ふやうに爲るとても、此の紀念を一の誘惑と做し、謙遜して神に對する信頼の心を、一層ふかくせねばならぬ。是れ實に我等の敵を、其の敵の武器を以て打亡し、光榮を神に歸する道である。

我等が罪を思出して、甚しき苦痛を感ずるのは、決して惡いとは云はぬが、併しながら之れと同時に、耶蘇基督の受難の功德を大に頼にして、深き謙遜を以て、神に其の罪の赦を祈らねばならぬの

である。

尙ほ又た神が、假令我等を其の撰民の數より退けたまふやうに思はれても、決して神に信頼を置く事を止めてはならぬ。其の時に謙遜を以て、斯う申上げねばならぬのである。「主よ、若し我が罪科を見たまはば、我れを退けたまふは勿論なり、然れども我れは主の哀憐によるべきは尙更の事なるにより、主の我れを赦したまはん事を、信頼す

るものなり、願ぐは憫然なる所造物なりと雖も、我れを祐けたまへ。固より我れの罪は、地獄に處罰せらるべきものに過ぎざれども、我れは主の寶血の價を以て、贖はれたるものなり。嗚呼、我が救主、我れは主の光榮の爲め、我が靈魂を救はん事を欲し、滿腔の信頼を以て、我が身を主の限なき哀憐の聖手に委ね奉る。主のみ我が主にて在せば、聖意のまに〳〵我れを計ひたまへ。然り假令

主が我れを殺したまふとも、我れは主を堅く希望して止まざるなり」と。

第六十五章　虚榮の誘惑

臨終の時　第三の誘惑は、虚榮と自負とである。如何なる口實の下にも、己れ及び己が事業に、聊たりとも誇つてはならぬ。我等の專ら心を安んずべきは、唯だ神と其の慈悲と、耶蘇基督の生涯の事業と、其の受難の功力とのみである。

我等は自分の目に、益す自分を見下ねばならぬ。若し我等の行ふた善を思出すならば、其の作者は唯だ神のみであると認めて、其の祐助を願ふには、既に情慾に向て、如何ほど大なる成功を得たにもせよ、決して己れの手柄によつて、其の祐助を希望してはならぬ。何時も恐れ入て、神の保護のみ我が唯一の希望となるべきものなるにより、若し神が其の御翼の影に、我等を引奇せたまはぬなら

ば、我等の手柄は餘り役に立たぬと、直實に自白せねばならぬ。

此の意見を忠實に守るならば、我等は敵に敗けるやうな事は決してない。又た我等を無事に天國へ導くべき道を、認むるに相違ない。

第六十六章　臨終の時に起る迷想及び無實の出現の誘惑

我等の靈魂の敵は、中々我等を苦しむるに飽足

らず、自ら光明の天使の姿に變じて、無實の出現を以て、我等を誘惑せんとする、此の誘惑の起る時は、心を動さず確乎として、已が無可有者なるを愈よ信じ、而して斯う云はねばならぬ「惡き者よ、汝の暗黑に返れ、我れは天より出現を受くるに足らぬ身である。我が望む所は唯だ一つ、童貞瑪理亞聖若瑟、及び他の聖人達の取次を以て、我が救主耶蘇の哀憐を得ん事これなり」と。

然し若も著名の徴を以て、此の出現は天より來たのであると、認られるやうな事があつても、之れに氣を止めぬが宜い。出來る丈け之れを遠ざけて、斯く之れを遠ざけても、謙遜の心から然うするゆゑ、神の聖意に逆ひはせぬかと、憂慮するには及ばぬ。若し此の出現が、果して天より、即ち神より出たものならば、神が自ら愈よ之れを證明して、少しも我等の損にはならぬ。聖寵を下した

まふ神は、人が謙遜の業を以て、之れに應ずる時は、決して之れを取去りたまふものではない。

臨終の時に惡魔が、我等に向て用ふる武器は、粗ぼ斯の如きものである。惡魔が我等面々に見込で居る所の、我等の固有の傾向に應じて、此の四個の誘惑の中の、何れかを撰んで用ふるのである、兎も角も此の恐るべき戰の時刻に先ち、我等は堅牢な鎧を身に着け、一番激敷我等の心を支配

する情慾を、勇ましく打破るのは、我等に取りての義務である。是れ即ち將來に取返しのならぬ勝負の決る最後の日に、容易く勝利を得る唯一の道である。

（畢）

心戰附錄

第一　基督教に於る完德

數多の人は、精神的修業を爲して、無駄骨折を爲る事がある。斯る事を免れる爲め、又た行先を知らずして、歩まざらん爲めに、先づ基督教に於る完德は、如何なるものなるかを、知らねばならぬ。

基督教に於る完徳は、神より賜りたる律法、及び禁誡を、嚴密に實行する事であつて、制限する事なく、神の聖意に適はんとの、唯一の目的を以て、其の律法に從ふ事である。人が之れに極るものである。

完全ならんと欲する基督信者に取りては、生涯の目的は、日々我意を爲す習慣を消し、何事も神の指導に依り、又た神を尊び、其の聖意に適はん

との目的を以て、之れを行ふ習慣を附ける事である

第二　完全に達する爲めに戰ふべき法

凡そ爲さんと欲する事を、云ふは易くして、僅少な言語を以て、盡す事が出來るけれども、事業に着手し、其の目論見を實行せんとする時に當り、其の事業の、困難に圍まれる事が見ゆるのである。人祖の犯罪以來、又た我等の惡き傾向の結果

として、我が身に於て神の律法に反する法があつて、始終に軍を起す所の、自己と世間と惡魔とに、戰はねばならぬものである。

第三　基督の新兵に必要なる三個の事

基督の新兵が戰を初めた以上、之れに三個の事が必要である、即ち大なる勇氣及び堅固なる決心と、好く整ふたる武器と、其の武器を巧妙に使用する習慣とである。

人の生涯は、地上に於る戰であると云ふ事を度々考へて、之れを以て戰ふ決心を爲ねばならぬ。此の戰の法則は、相當に戰はざるものは永遠の死を得るのみである。此の戰を爲すに、專ら勇氣を振はせるものは、自己を賴まざる事と、神に賴む事と、神が我等にあつて、危險を脫せしめんとしたまふ事を、確信する事とである、自分の力や自分の心の巧妙な事を、少しも恃まずして、唯だ

神の全能全智全善にのみ頼む度毎に、屹度勝利を以て、戰の局を結ぶであらう。武器は抵抗と強制とである。

第四　抵抗と強制及び之れを用ふる法

抵抗と強制とは、實に重くして、疲勞を來す武器である、然し餘程必要にして、之れがなくては到底勝利は得られぬのである、之れを用ふる法は左の如し。

腐敗したる己が意志、及び惡き傾向によつて、神の思召を欲せず、之れを爲すまじと思ふ時は、必ず之れに抵抗して、斯う云はねばならぬ「默れ、何う勸められても、我れは必ず神の聖意に歸服せん」と。

己が意志と惡き傾向とが、我等を誘はんとする時、之れに抵抗する最う一個の法は、斯う云ふ事である「我れは神の助力を希望して、決して〳〵

神の聖意の外に事を爲さじ、主よ願くは我れを祐けたまへ、今や聖意をのみ爲さんと決心したれど、恐らく此の決心は、舊來の惡き傾向の影響に、負けるかも知れぬにより、斯る事を免したまふ勿れ」と。

斯て甚だ抵抗するのが苦勞にして、薄弱なる意志の、耐え得ざるが如く思ふに至らば、勇々しき心を以て努力し、天國に至るには、必ず强制せねばならず、自ら其の情慾を懲す者の外は、之れに至るを得ざる事を記憶せねばならず、憂慮と强制とによつて、心が非常に苦く、殆ど惱に充たされるやうになるならば、ゼツマニヤの園に於る、耶蘇基督を思出し、其の苦痛に己が苦痛を併せ、其の功力によつて、己れに勝たしめたまはん事を、切に願はねばならぬ、其の時には天の父に、心の底より斯う申上げる事が出來る「願くは我が欲す

神の聖意の外に事を爲さじ、主よ願くは我れを祐けたまへ、今や聖意をのみ爲さんと決心したれど、恐らく此の決心は、舊來の惡き傾向の影響に、負けるかも知れぬにより、斯る事を免したまふ勿れ」と。

斯て甚だ抵抗するのが苦勞にして、薄弱なる意志の、耐え得ざるが如く思ふに至らば、勇々しき心を以て努力し、天國に至るには、必ず强制せねばならず、自ら其の情慾を懲す者の外は、之れに至るを得ざる事を記憶せねばならず、憂慮と强制とによつて、心が非常に苦く、殆ど惱に充たされるやうになるならば、ゼツマニヤの園に於る、耶蘇基督を思出し、其の苦痛に己が苦痛を併せ、其の功力によつて、己れに勝たしめたまはん事を、切に願はねばならぬ、其の時には天の父に、心の底より斯う申上げる事が出來る「願くは我が欲す

る如くならず、父の思召の如くにして、聖旨の行はんれ事を」と。

而して出來る丈け度々、神の思召にれが意志を歸服せしむるやうに修業し、何事も其の尊き思召に從ふてのみ欲するやうに力めねばならぬ、如何なる業を爲すも、私を脱して、最も清き意志を以て恰も完徳は此の業に極る、神の聖意と光榮とは、此の業のみによるが如く力めねばならぬ。若し後

に、何か掟に背いた事を思出さば、深く之れを悔む事を表し、之れを機會に、愈よ神の凡ての掟、殊に現に守るべき掟に對して、全く神に從はんとの決心を立直さねばならぬ。

因に、神に從ふべき機會があつて如何に細些なものと、見ゆるとも、之れを無駄に過さゞる爲め一つ云ふて置たい。若し小き事に於て、忠實に神に仕へたなら、神は又た大なる事に於て、忠實に

なる恩惠を賜はるに相違ない。終りに臨んで最う一つ勸めて置きたい。何か神の一個の掟を思出す時は、先づ前に神を拜禮して而して後、折のある時忠實を守る爲め、要すべき助力を賜はらん事を、祈らねばならぬ。

第五　始終我等の意志に就て警戒し平生如何なる情慾に支配されるかを認むべし

出來るだけ我れと我が身を省み、平生如何なる

情慾が、我が意志を取込むかを、認むるやうに、爲ねばならぬ。何故なれば無論この情慾は、外の情慾よりも、尙ほ迷に入らしめ、奴隷にならしむるものであるから、元來人間の意志は、何歟の情慾に、支配せられぬと云ふ事のないのは、人性の固有である。人の心に專ら影響する情慾は、左の十一のものである。

愛、憎、好、嫌、喜、悲、希望、失望、恐懼、大

膽、怒。

何か自愛より出でゝ、神の聖意に適はぬ一の情慾の影響を認むれば、力めて我が意を自愛より離れしめ、神を愛する事と其の律法及び禁戒を實行する事に歸服せしめねばならぬ。

斯くすべきは、啻に大罪に導く情慾に對してのみならず小罪に入らしむる情慾をも、警戒せねばならぬのである、成程小罪に導く情慾の刺激は、

弱くして少しづゝ覺ゆるものなれども、意志の承諾する時には、我等の要する力と元氣とを去らしめ、大罪に陷るの危險にも、逢はしむるものである。

第六　我が主なる情慾、即ち己れ及び被造物を愛する情慾を拔去り、之れを犧牲に供すれば、間もなく心の全體が秩序と義務とに服するに至る

意志を支配する邪慾を容易に、又は順序を追て脱するには、先づ全力を辺めて、我が重なる情慾を制し、且つ治むるやうに、力めねばならぬ。此の情慾は取りも直さず、自己を愛し被造物を愛すると云ふ事である。一旦此の情慾を押ふるに至らば、之れと共に、之れによつて出でゝ活動する所の他の邪慾は、消失せるであらう。此の道理を聊かでも熟考すれば、其の適當なる事を覺る。何故な

れば、何事かを愛して、之れを樂にすればするほど、必ず之れを欲するが、之れに反して、愛する所に反對すればする程、之れを憎み、之れを忌み、之れを悲むに至る。又た愛するものに非ざれば、之れを希望する事なし。

尚ほ又た愛する所を求むるに、妨ぐるものがあつて、全く打勝ちがたいと思へば、失望に陥る、其の愛する所を妨ぐるものがあつて、或は恐懼、

或は大膽、或は輕蔑が起るのである。

然るに我が主なる情欲に勝ち、之れを治むる方法は、先づ愛するものに於て、如何なる特質があつて、心を誘引し、愛着せしむるかを見て、即ち此の愛、此の愛着の目的は、何物たるかを、認むる事である。

若し意志を引くものが美、或は愉快或は有益ならば、心の中に繰返して幾度も、斯う云はれる「嗚

呼、神の善、神の美德に勝る善且美は、何所にあらんや、神は凡ての善、凡ての德の、唯一なる泉ならずや、神を愛するより一層有益なる事、愉快なる事を、想像し得べきや、蓋し神を愛すれば、人は神に化し、神によつて滿腔の快樂を得、且つ喜ぶものなればなり」と。

尙ほ又た人の心は、神の物である、何故なれば、神は之れを造り、之れを贖ひ、日々に新しき恩を

施して「我が子よ、我れに心を與へよ」と曰ひ、人の心を求めたまふからである。

斯く人の心は　神のものなるに、自らは淺ましくして、なか〳〵己が義務を果す事は、到底出來ぬものゆゑ、何よりも神をのみ愛するやうに又た聖意に適ふ事をば聖意に適ふ程度と方法とによつて、愛するやうに、特に心と力とを盡さねばならぬ。

此の通りに、心と力とを盡して力むべき事は、嫌と云ふ情慾に就ても爲すべき事である、嫌は愛と同く、基督教に於る完德の、基礎であつて、嫌ふべきは唯だ罪と　凡て罪に誘ふ事とのみである。

第七　意志を助力すべし

自然の傾向の影響によつては、我等の意志は弱く情慾に逆ふて之れに勝ち、神の命に從ふて之れを治め、神に服せしむるのは、甚だ六箇敷事であ

る　經驗は之れを證して餘あり、何故なれば、如何にも己れに克つの善意は、滿腔にあるやうに、度々思はるれど、偶然機會が起るか、情慾の刺激を覺ゆるや、忽ち其の善意は消失せて、其の情慾の壓制に負けて了う、之れに由りて見れば、斯る危險の場合に於て、如何に意志を助力するの必要あるかを、悟らねばならぬ。意志は己れに向つて强く成り、情慾の奴隷を脱し、且つ逃れて、專ら

己れを神、及び其の思召に、全く委ぬるやうに爲ねばならぬ。

第八　世間に打勝には意志が非常に助力を要す

專ら我等に情慾を起させ、之れを强からしむるものは、世間と凡て世間に屬する物とである。即ち世間は我等の眼前に、其の高位、其の寶物、其の快樂等を見せ、以て我等の心を引込むのであ

る。然るに意志は此の世間の誘引に勝た上、暫く息を吐き、他の目的に向はんとする事がある。何故なれば、意志は何かを愛せず、何の快樂を覺えずには居られぬからである。

世間に打勝方法は、先づ世間、及び之れに屬するものは、實際何物であるかを、眞面目に考へる事である、我等は時によつて、慾の爲めに目を非常に眩まされて、迷を避けるにサロモンの經驗上

の格言を以て、我が考、及び決心を強むる必要がある。サロモンは國王の最も賢者にして、世間萬事に就て、憫然にも實驗した上句の言に「空の空、空の空なるかな、凡て空なり、心の惱なり」と云ふた。

我等も日々に此の言の眞實なるを自ら實驗す、看よ人の心は、飽くまで樂しむ事を頻に望み、欲い事を悉く與へられても、飽足らぬのみならず

却て空腹が彌増すのである。之れは怪しむに足らぬ。世間の物事を樂しめば、影を喰ふばかりであつて、精神を奪ふものは、夢、空、迷なるものゝみである、是れでは何樣しても、空腹を飽かす事が出來ぬ。

世間の約束は無實が多く、迷に滿され、一の事を約しても他の事を與へ、幸福を與へんと約すれど、與ふるは憂慮のみ、約すると雖も多くは何を

も與へず、或は與へて直に取返すのである。縱や與へたものを暫く渡して置ても、之れは情慾を引起されたもの、不潔を以て望を滿たしたいものゝ憂慮を增すばかり、然ふ云ふ人には詩篇の詞の「人の子よ、汝等は我が光榮を耻ぢしめて、何時まで心が頑固なるや、何故に空き事を好み、僞を慕ふや」と云はれるのである。

斯る明盲目に對しては、世間の僞の寶に、何

か實際好所があると讓るにしても、彼等は地上に於る人の生命が、矢よりも早く過ぎ行く事に就て、尙ほ目を眩ます事が出來るか。既に代々の帝王、國王、諸侯、君等の得た快樂、高位、榮曜などは何樣なつたかと云はれやうか、是れ皆な夙に影の如く消失せて了うた。

然らば若し實際世間に勝事を欲し、自ら世間を否み、又た世間に否まれ、尙ほ聖ポーロの言の如

く「我等世に向つては、己れは十字架に釘けられ、世も我等に向つては、十字架に釘けられたもの〻如く」なりたいと思ふならば、眞正の道は斯うである、即ち我が意志が、世間の誘惑力に奪はれぬ前に、世間の空と迷に過ぎぬ事を篤と考へ、而して知識と意志との目が醒めたならば、世間を輕んずる事は容易くして、凡て身を差出す被造物に向つて、斯く云ふ事が出來る「汝等は皆な被造物

に過ぎぬ、退け、我れは汝等に愛着する事を好まず、我が被造物の中に求むるは其の造主なり、我が欲するは身體にあらずして精神なり、我れは決して汝等を望まず、我が望、我が愛は唯だ、汝等の特點の出所なる神にのみ向ふ」と。

第九　意志に得さすべき第二の助力

意志に得さすべき第二の助力とも云ふべきものは、惡魔を情慾から起る凡ての邪なる感動の、原

動者なりと認めて、之れを遠くへ退ける事である。

凡そ己が心の中に、情慾の發動、及び猥なる望に勝ちて之れを押へる度毎に、惡魔を退けて之れに勝つのである。故に惡魔を逃がさんと欲するなら、情慾に逆へ、是れは使徒聖ヤコボの與へられた訓誡である、併し茲に云ふて置たい事は、時によつて惡魔の攻擊が甚だ烈しくして、情慾の感動を起さす時には、之れに抵抗する事が出來ぬと思

ふ程に成る事がある。夫れでも決して驚くには及ばぬ、何時も勇ましく之れに向ひ、又た我等と共に在す神は、決して無理に強ひられる事を、許したまふ事なしと、確信せねばならぬ。幾度も云ふが、必ず抵抗せよ。然らば辛抱を以て、勝利を得べしと斷言す。

辛抱を以てと云ふたが、即ち二三度抵抗したばかりでは足らず、誘惑の起る度毎に抵抗せねばならぬ。一體惡魔の固有の策略は、人に勝つ事が今日出來なんだならば、再び之れを明日誘惑せんとす、今現に抵抗したものをば、次の周間に復た遣り蒐つて誘惑せんとす、斯く大なる忍耐を以て、賢く時を延し、或る時は激しく、或る時は巧妙にして、目的を達するまで遣り蒐るのである。

畢竟我等は決心に於て辛抱せねばならぬ。何時も武器を握つて、前に勝利を得た迚も、之れに安

んじてはならぬ。

人の生涯は止み無き戰であつて、其の局を結ぶべき勝利は、今日や明日に得やうとする勝利でなく、生命の終局、即ち生涯の末の勝利である。

斯う云はるれば辛さうに思はれるが、惡魔の方でも、此方から頻に抵抗すればする程、彼等も耐らぬやうに辛く思ふのである。然れば我等は我が心の慰籍に、斯う云ふても宜い「地獄のサタンよ、

退け、其の苦に歸れ、汝の苦しむのは、其の罪惡によつて招いたのであるが、我れは我が主に背かざる爲めに苦しむのである、汝の苦は終なけれど、我が苦は神の聖寵によつて、終なき平和に交換べきものである」

第十　傲慢の誘惑

前章に云ふた誘惑は、惡魔が世界の高位、財産、快樂等の誘引を以て差出す誘惑であるが、今は傲

慢、自負、虚榮等に就て一言いはねばならぬ。此の三個の惡德は、多く知れずして、又た重く神に背く故、別して恐るべきものである」。

嗚呼幾千の神の忠僕や勇々敷兵士が、數年來數多の勝利を得たるに、傲慢に敗けて惡魔の奴隷となつた。

此の恐ろしき試、此の隱れたる圈を逃れる道は、恒に恐れると云ふ事である。恐れて慄きながら、善を行ふべき事である。是れ即ち自愛、及び傲慢の隱れたる虫が、其の善事に附かざる爲め、又た腐敗して神の聖前に、否むべきものとならざる爲めである。

之れに由つて善を行ひながら、何時も謙らねばならぬ。又た何時も尙ほ好くするやうに、力めねばならぬのである。恰も未だ如何なる善事をも行はざる如く、又た假令最早力の及ぶ丈け盡したと、

敢て信ずる事があるとも、尙ほ心の底より自白して、我等は實に無用の下僕に過ぎぬと、云ふ筈である。

併しながら、何よりも前にすべき事は、數次耶蘇基督に依頼し、其の聖寵の助力を與へられて、傲慢を防ぎ、心の謙遜になるやうに敎へられん事を、願はねばならぬ。又た數次最も謙遜なる天主の聖母に依頼して、我等に謙遜の德を、求める事

を祈るが宜い。謙遜は取りも直さず、他の凡ての德の基礎であつて、此等を發達せしめ、又た能く保存して、失せぬやうにするのみならず、却て尙ほ深く根ざすやうにして、一層强くならしむるものである。

既に此の重大なる問題は、心戰に就て長たらしく論じたから、茲には之れを加へた丈けで止めて置く。

第十一　意志に得さすべき第三の助力

度々我等の意志が力を得る第三の助力は、祈禱と云ふものである、一旦誘惑の襲ひ來る事を覺ゆれば、直に神に依頼して「嗚呼、主よ、我れを祐けたまへ、速に我れを助けたまへ」と云ふやうに馴れねばならぬ。

然れば祈禱の武器を以て戰ひ、又た神の目前に居るとの念を楯に取て、始終自己を恃まず、神に

頼むとの鎧を附けて居らねばならぬ。此等の條件を守りさへすれば、必ず勝利を得るのである。何で祈禱を以て打勝たれぬ妨碍があるものか、又た自己に頼まずして、神に頼むとの念に基いて抵抗すれば、如何なる敵が之れに耐え得やうか。

又た神の聖意に適はんとの、唯一の目的を以て、神の目前に戰ふものが、何樣して負けるかも知れぬ杯と思はれやうか。

第十二　欲する度毎に神の目前に在る事を默想し馴れる法

欲する度毎に神の目前に在る事を默想し馴れるには、度々神は我等の目に見えざれども、現に茲に我等の前に在まして我等の凡ての思念や行爲を見そなはすと考へねばならぬ。

又た我等の周圍に在る凡て被造物は、皆な窓の如きものにして、神は其所に見えざれども、其の

窓から我等を眺めたまふと想像して、神から己れに斯う云はれるのを、聞くが如くに爲ねばならぬ

「願へよ然らば受けん、願ふものは必ず受け、戰ふものは開かるべし」尙ほ又た凡て被造物は、我等が神の目前に在る事を、默想する利益になる道がある。即ち其の凡てのものにある原質を、思はざるやうにして、此等を存在せしめ、之れに活動及び生命を賜る神に精神を上げるのが、其の道で

ある。

然らば心戰、及び何歟の修業に、祈禱を添る事を望む時は、今述べた方法を以て、現に神の目前にあると默想して祈禱に蒐り、要する所の助力と保護とを、願はねばならぬ。

一つ知らねばならぬ。即ち神の目前にあると默想し馴れる事が、容易くなるに從つて、之れで大なる勝利を得て、限もなき寶を得るに相違ない。

殊に神の目前に應はぬ感じや、思念、言語、行爲などを防ぐ方法となつて、天主の聖子の尊き生涯に、似合ぬ事を退くる道となる。

尙ほ又た神は此所に實際ましますによつて、其の目前に在る事を、絶えず默想する補助と成る筈である、何故なれば、凡て自然力と云ふものがあつて、其の作用に限があると雖も、現に其所にあるか、或は近くある時には、幾分か其の力の影響

を及ぼす事が出來るによつて、況て其の力は限なく、其の作用は云ふに云はれぬ程、他に及ぶ所の神が、現に此所に在すならば、其の力を著しく及ぼさせたまふこと疑なし。

既に今示した何時の場合にも用ひられる祈禱の法、即ち神の助力を願ふ事の外に、各自の境遇に適合する方法がある。假令ば神の正義に從ひ度と思ふて、之れを知らんと欲する時は、詩篇にあるが如き語を用ひても宜い、即ち「主よ祝せられたまへかし、願くは主の誡を守る事を我れに敎へたまへ、主の掟の道に於て我れを導きたまへ」と。

又た天主の凡て我等に與へ得たまふ事、又た我等に願へと命じたまふ事を、求めんと欲する時は、主禱文を用ひて、出來る丈け熱心と汴意と志とを盡して、其の祈禱を唱へねばならぬ。

第十三　祈禱に關する意見

茲に口禱、即ち口と心とを以て唱ふるものゝ事を述べ、默想の事は後に語るべし。

第一に云ひ度いのは、祈禱は短く、又た數次すべきものである。熱心な望を以て祈禱を活動させ又た神が必ず、我等を祐けんとしたまふ事を思込んで、之れを專ら信賴せねばならぬ。神は勿論我等の思ふ樣に、欲する儘には祐けたまはずとも、好き時節に、又た最も有益な方法を以て、祐けて

下さるに相違ない。

第二何時であつても、祈禱をするのに、現に或は暗に、左の如き語を以て、之れを結ばねばならぬ。即ち願くは主の善良によつて聽きたまへ。或は主の約したまひし如くとか、主の光榮の爲めにとか、慈愛たまふ御子の御名によつてとか、其の御苦難の功力によつてとか、主の嘉したまふ童貞瑪理亞の名を以てとか、願ひ奉ると云はねばなら

ぬ。

第三祈禱には時々熱心なる投詞を加ふるが宜い

假令ば主よ至愛なる聖子の御名によつて、主を愛するを得せしめたまへ、嗚呼、我が神よ、何時主を眞實に愛し奉るを得べきや」と。

斯の如き投詞を、主禱文の願に加へても宜い、一段落毎に加へても、又は總體の願の終に加へても宜い。假令ば、天に在す我等の父よ、願くは御

名の尊まれん事を、嗚呼、父よ何時になれば御名は普く地上に於て、人々に知られ、尊まれ、光榮を歸せられる事あるべきや。嗚呼、此の日を滿し云々。

第四善德、及び聖寵を願ひながら、如何に德を重んずべきか、如何ほど我等は之れを要するか、又た神の廣大なる事、善良なる事、尙ほ又た願を爲る我等は、實に聽入られるほど、勳功なき事を考

べるが宜い。斯の如くすれば、熱心は志し及び望を以て祈禱を爲し、益す尊敬と信頼とが增加し、又た謙遜の心を尙ほ深く覺ゆるに至らん、終に祈禱の目的を考へて、神の聖意、及び光榮の爲めに適合するやう、之れに向けねばならぬ。

第十四　祈禱の別法

祈禱をするには、最も一つ最も好き方法がある。即ち唯だ一個の言語も出さずして、心を神と一致

せしむるばかりの事である。其の時は間々愛情に滿されたる嘆息を以て之れに依頼し、心の目を以て之れを仰ぎ、專ら聖意に適ひ度との志を上け之れを相當に且つ純粹に愛し之れを尊び、之れに事ふる爲め、其の祐助を一心に、熱誠に望む事を献げねばならぬ。或は既に前の祈禱を以て願ひし恵を求めんとの望を、之れに献げても宜い。

第十五　意志に得さすべき第四の助力

意志に得さすべき第四の助力は、神を愛すること云ふ事である、此の愛は意志を強むること甚しく、之れに由れば、仕懸り得らぬ事は何もない、如何なる事業でも仕懸り得れぬ、如何なる情慾、及び誘惑にでも打て懸る事が出來るのである。此の愛の得られる法は即ち祈禱をして、度々神に願ふ事である、默想も大に補助となる其の時に最も有益な觀念に就て、熟考するが宜い。假令ば神は如何

なるものなるか、神の力、智惠、其の善、其の美は如何に廣大にして、限なきものなるか、又た人間の爲めに、神の爲したまへる事は幾干ぞや、尙ほ要するならば如何ほど爲したまふ聖意であるか如何なる愛を以て、我等に何樣な仕打したまひ、今も日々我等を愛して、如何ほどの事を爲したまふか、又た純粹の心を以て、其の誡を守り、其の聖意に適はんとて、專ら勤めたものは、來世に於

て、如何に寛大の報酬を受くべきか等の事を、考へるが宜い、其の大體を少しく述べん。

第十六　神の本有の觀念

神は如何なるものなるかと云ふに、獨り自己を全く知るものたるものが、此の問題に對して、答へて曰はく「我れは有りて在るものなり」と、語を換へて云へば、神は獨り自己の力によつて有り、且つ然るものにして、有らざるを得ざるものであ

る。

此の稱號は神の固有のものにして、高崇且優勝なるもので、他の被造物には一つも當嵌るものはないのである、諸侯も國主も帝王も、天使も凡て世に在る如何なるものも、決して當嵌らぬのである。何故ならば、他のものゝ在るのは、皆な神によつて、其の存在を受けて居るので、全く神に屬するものである、自己は實に何にもないのである

から。

是れに由りて見れば、人が被造物に於て、造物主を愛する事でなく、其の最上の主の目的に從つて、之れに愛着する事でなく。被造物其物に愛情を置て、之れに愛着するのは、如何にも無駄な事であると云ふ事が分る。然り無駄と云はねばならぬ。何故なれば、人が無駄なものを愛し、又た自己では何にも成らぬものを以て、滿足する事が出

來ると想像し、又た身を盡して、被造物に何かの惠みを願ふと雖も、唯だ自己は之れに由りて益す貧く成り、終に死するに至るべきものである。

故に若し適當に愛せんと欲するならば、神を愛せよ、神の外に心の需用を滿たすものなし。

第十七　神の全能の觀念

誰でも知つて居る通り、世の有力者を擧ても、材料なく、又た之れを組立るに建築の原理なけれ

ば、國家の都會を造る所でなく、一つの家だに造る事は出來ぬのである、其の上に尙ほ空間も時間も入る、而して之れが皆な揃ふたとしても、建物が立派に自己の目論見に合ふ事はない、然るに神は其の全能のみにより、瞬間に無より萬物を造りたまふたのみならず、之れと同樣に、造作もなく無數の世界を造る事も出來れば、此等を亡して無に歸する事も出來たのである。此の觀念を默想す

ればする程、益す斯く全能なる神を愛する理由を新に見付けるに相違ない。

第十八　神の全智の觀念

神の智慧は如何程高崇にして、如何程無量なるかを、覺り得るものであらうか。

聊でも之れを想像するに、目を上げて、上天の華美を仰ぎ、又た地上の奇なる事を眺め、全世界の萬物の妙なる事を考へよ、此の不思議な事を解

するには、唯だ造物者の、量られざる全智を以てのみ、知るべきものである。

次に人間の生涯を考へ。之れに伴へる場合、又は境遇を考ふれば、聊な事でも、亂雜に見ゆるものでも、神にとりては、實に不可思議なる智慧より、出でざるはなし。

而して尙ほ世の贖の妙理を考ふれば、是れ社、最も高崇なる全智を、全く現はすものである。聖

ポーロの語に「嗚呼、廣大なるかな神の富と智慧と知識とは如何にも其の判定は覺り難く、其の道は極め難し」と（羅馬書十一章三十三節）にあり。

第十九　神の全善の觀念

神の凡ての德の如く、神の全善は無限にして、到底人智の及ぶものではない。然れども、外部に現れる所ばかりでも、勝れ且つ廣大にして、世界到所に現れざるはなし。何故なれば、萬物の造

られたるは、神の全善の結果ではないか、彼物の保存せられて、世界の治まるのも、神の全善によるではないか。尙ほ又た世の贖の方面を見れば、特に神の全善は、得も云はれず、如何にも限なきものたる事を、現すものである。我等が天主の聖子の犧牲によつて、贖はれたのは、神の全善の惠ではないか。又た日々聖體の秘蹟を以て、我等を養ふは、之れも神の全善ではないか。

第二十　神の美德の觀念

神の美德は廣大にして限なし、神は之れを以て他を見ず、永遠に限なく喜び、限なく幸を得るのを知るのみで、其の美德の如何なるものであるかと云ふ事を、察する事が出來る。

然れば人たるものは、神の全善によつて、己が召されたる高位の程を知り、頑固なるものとならず、目を反ける事なく、無駄なもの、迷に過ぎざ

るもの、人を迷はす蔭に過ぎざるものを、愛するやうにしては不可。神は我等を、其の全能全智全善を愛するやうに招き其の美德の樂に與つて歡を共にするやうに招きたまふのである。然るに之れを聞かざるが如き有樣は如何、今や爲す所を考へ、後を待たずして、改むるやうに、急がねばならぬ。後は後悔するとも、何にも爲る事は出來ぬ。

第二十一　神が人の爲めに爲し給ふた事之れ

を爲したまふ愛、又た要するならば尙ほ多く爲したまはんとする聖意

神が人の爲めに爲たまふた事を辨へるには、萬物の造られた事、世の贖はれた事に就て、默想すれば宜い。

斯く神が人の爲めに、萬事を爲したまふた愛の程に至つては、實に限なしと云ふても足らぬ。其の贖の價は限なきものなれども、神の聖意は尙

ほ之れに加ふべきものである。若し實際必要であつたならば、尙ほ激く苦み、數度でも死ぬる大御心であつた。

然らば我等は贖はれた恩謝として、自分の身を全く、限もなく盡さねばならぬのに、如何にして神の聖意を充分に感謝する事が出來やうか。何故なれば神の聖意は、實際の行爲より尙ほ限もなく勝れて居るからである。

第二十二　天主の日々に人の爲めに爲し給ふ事

一日も一刻も、人は神より何かの新しき惠を受けぬ事はない。何故なれば、毎日毎刻、神は人に存在を保たせて、之れを造る事を續けたまふからである。又た時々刻々、神は人に事ふる如くにして、天をも地をも空氣をも海をも、尙ほ之れに含まれるものをも悉く、即ち被造物を皆な人間の

使用に供したまふからである。

尙ほ又た日々聖寵を賜り、惡より救出して善に導き、或は罪を免れしめ、或は過つたのを起立しめ、尙ほ新に落度を爲ぬやうに、方法を賜はるのである。且つ罪人を待ちて悔改むるやうに之れを召し、罪人の立返るや、之れが赦を願ふよりも早く、之れに赦を下したまひ、日々人間の救靈の爲めに聖子耶蘇、及び其の十字架の奥義の富を、悉

く人に供して、聖體の秘蹟の中に、始終人間の爲めに居らしめたまふ。

第二十三　神は罪人の悔悟を待ち且つ其の罪を寛容して之れに顯し給ふ甚き愛憐

罪人に對する神の寛容に於て、神の甚き愛憐を辨ふるには、先づ天主は云ふに云はれぬ程、德を嘉したまひ、其の如く、又た之れに反して、限もなく惡德を嫌ひたまふ事を考へよ。

即ち罪人が神の威稜の尊前、其の最も清き目前に、敢て重ねゞの夥しき罪を犯すのに、神が之れを寛容したまふは、如何なる愛憐ぞや。罪人は實に斯う云ふ事が出來る「嗚呼、主よ我れ能く認む、我れは罪を犯しつゝありしに、主の我れに向つて、汝は罪を重ね、我れは赦すに孰れが勝を得べきかを見んと、我が心に云はれるが如きを」と。

想に此の觀念を能く默想すれば、必ず神の聖寵を以て、罪人の心を感ぜしめ、速に改心するに傾向しむるに、最も適當である。若し之れを考へても、少しも感ずる事なくば、實に深く且つ探るべからざる神の聖計は、大に恐るべきものである。何故なれば一日きたりて、俄に恐ろしき打擊を以て打ちたまひ、到底取返しする事は出來まい。」

第二十四　來世に於て神は自己に始終忠實に

事へた者のみならず改心した罪人の爲めにも爲したまふべき事

神が天國に於て、其の撰まれた人々に報ゆるに、與へたまふべき恩寵と歡喜とは、廣大且優勝なるものにして、到底想像する事は出來ず、其の價値に應じて宜しく之れを望む事は出來ぬ程である、數回福音書の假令に云はれてある如く、神の自ら設けたまふた饗宴に列り――神の手づから、

限なき福樂の尊き糧を戴くのは、人に取りて如何ほどの榮譽なるか、誰れが之れを能く覺り得べきや、何樣して福者が主の歡喜に入れられるを想像する事が出來やうか、神が天國に在る福者に賜ふ所の愛と榮福とは、誰れが之れを能く探り得やうか、博士聖トマは此の事に就て書して曰らく「全能の神が自己を天使や聖人に供したまふ大御心は恰も神が各自の什人にして、其の者を已が神の如

くしたまふやうに思はるゝなり」と。

嗚呼、神よ主が其の造りたまひしものに對して、凡て爲したまふ所を熟考すれば、主は恰も愛情に羈されたまへる如くに思はれ、主の唯一の幸は、此の憫然なる被造物を愛して之れを惠み、自己を以て之れを養ひたまふに在りと思はるゝに至る」。

嗚呼、主よ主の我等を愛したまふ愛の程を覺らしめ、我等をして愛を以て主の愛に報はしめ、且

つ主を愛して其の愛情により、主と全く一致するを得せしめ給へ。

嗚呼、人の心よ、汝は何所に至るや、汝の追究する所は影なり、風なり、虛無なり、斯る迷の中に、畏くも汝の棄る御方の誰なるかを考へよ、是れは全能者なり、最上の智者なり、云ふに云はれぬ愛憐なり、造られざる美德なり、至高の善なり、萬德の限なき大海なり、自己は汝を追究して、大

聲に汝を呼び、汝を來らしめん爲めに、舊恩を以て引くを足れりとしたまはず、尙ほ新に恩を賜はんとす。

汝に於る斯の如き忘恩の沙汰は、何より起れるにや、是れ全く汝が祈禱を爲さず、默想に從事せざるが故なり、而して自ら承知しながら、光明と愛熱とを退けるにより、如何にして暗夜の業を脫するを得んや。

哀憐なる心よ、今や來りて祈禱と默想とを練習して見よ、玆に至らば基督信者の大學は、取りも直さず我意を棄てゝ神の意志をのみ爲すを力め、已れを嫌ふて神をのみ愛するにありと、明かに悟るであらう。此の大學がなくしては他の凡ての學問が何になるか、又た如何なる學問が、此の神より出づる大學に比するを得べきや、斷言す、此の大學がなくては、世に在る他の勉强、他の學問は

唯だ傲慢や自負の機關となるばかりで、知識を明かにすれども意志を暗まし、多くは之れに身を委ぬる人々を、亡に至らしむる事がある。

第二十五　意志に得さすべき第五の助力

意志に得さすべき第五の助力は、自己を嫌ふ事である、夫れでなければ、萬善の原なる神に對する愛を、惹起す事は出來ぬ。

此の助力を求むる法は、先づ神に之れを願ふ事

である、次に自愛が既に生じて、又た日々に人の心に生ぜしむる、惡き成跡を考へねばならぬ。此の世でも後の世でも、禍害は如何なる禍害でも、自愛より出でざるはなし。

自己を愛す、即ち自愛の及す所の害は甚しくして、若し天國にでも入込む事が出來るならば、彼の天のエルザレムを以て、程なく罪に充てるバビロネの如く爲すに至らん、斯う云ふのは即ち今世

に於て、自愛が人の心に及す惡き結果を以て云はれるのである、若し自愛が此の世で無くなるものならば、地獄の門は閉されん。

然らば人が自愛は如何なるものであるか、如何に人の靈魂を滅亡に至らしむるかを知つた以上、此の自愛を憎まずに居られやうか、若し之れを憎まぬならば、自ら己が敵に成る。

第二十六　如何にして自愛を認むべきか

自愛が如何ほどまで、我等を支配するかと云ふ事を、能く認むるには、我が意志が如何なる情慾に、專ら引込まれるかと云ふ事を、度々調査ねばならぬ、即ち意志が物を受したり、望んだり、喜んだり、悲んだりするのを見て、果して其の愛する所、望む所のものが、愈よ善德に起因するものであるか、神の掟に合ふか合はぬか、又た其の喜や悲が、全く神の思召に適ふて居るか、或は之れ

に反して、世間や被造物に對する、愛着心から起つて居りは爲ぬかを能く見ねばならぬ、又た我等が被造物に對する動作は、必要の爲めであるか、入用に應じてゞあるか、神の思召に從ふてゞあるかと云ふ事を調査ねばならぬ。

若し此の種々の點に就て、何か誤つて居ると認めたならば、疑なく自愛が、我等の意志の中に頭立て、我等の行爲の主なる原動者になると云ふ譯

である。

假令我等の意志は唯だ善德、又は神が我等に要求したまふ事のみを、專ら望んで居ると見ても、然うするのは實際、神の思召に導かれてするのか或は何か好く事があつて、出來心でするのではないか、と云ふ事を考へねばならぬ、何故なれば、時によつては、我等が身を委ねてする所の善業、祈禱、斷食、聖體拜領等の信心の修業が、斯る不

完全の心組より出づる事が往々あるからである。

斯る不完全な心組を認むるに、助扶となるものが兩個ある、先づ我等の意志が、凡て善を爲す機會を、如何なるものであつても、好嫌の別なく喜んで之れを受けるか、又た若し困難の起りさうな時に、悲哀や憂慮や心の亂擾に陷るならば、或は成功の時、無駄に滿足して自負に流れるならば、是れ不完全の心組の證據になるのである、實際に

神が我等の心組を、最初から起させたまふたとしても、尙ほ事を爲すに定むる目的の重なるものは何であるかを見ねばならぬ、若し唯だ神の聖意のみを目的とすれば宜いが、夫れでも全く安んじては行かぬ、何故なれば、自愛と云ふものが、甚だ狡猾にして、一番良行爲の中にも、極く窃に染込み、道德を實行するにも染込む故、用心せねばならぬのである。此の自愛と云ふ奴が顏出しすれば

直ぐ非常の憎を以て、殺して了ふまで追蒐ねばならぬ、何時でも、何所でも、最と小き事に就ても、自愛を殺して了はねばならぬ。隠れた敵を何時も用心すべきものであるから、何か善業でも致した時には、神の尊前に謙り、己れを咎めて、主に赦したまはん事と、自愛を避けしめたまはん事を、一心に願はねばならぬ、日々如此でもすれば宜い。朝來精神を神の方へ上げて、何時にしても決して

背かず、別して今日は背かぬ事を約し、却て何事も唯だ其の尊き思召、其の聖意に適はんとの、唯一の目的を以て、之れを全うせんとのみ、望む事を示さねばならぬ、然う云ふ志を以て、神に數次祈禱を以て依頼し、我等を棄てる事なく始終保護したまひ、我等に要求したまふ事を覺り、何時も其の尊き思召に適合する覺悟して居る事を、願はねばならぬ。

第二十七　意志に得さすべき第六の助力

人の意志に得さすべき第六の助力とも云はるゝものは、彌撒に與り悔悛と聖體の秘蹟を授る事である。何故なれば、我等の意志が惡を避け、善に進むに必要にして重なる助力は聖寵であるから、聖寵を增す所のものは、凡て意志の本統の助力に成る、然るに彌撒に與つて、以て聖寵の增すを得るには、左の如くに拜聽せねばならぬ。

既に知らるゝ通り、彌撒聖祭は、之れを三部に分ける事が出來るが、其の第一部、即ち入祭の時より麵包と葡萄酒とを奉獻するまでは、力めて心の中に、神を愛する熱心の望を起さねばならぬ。神の御子が天降て此の世に生れ、愛の火を燃さんが爲めに、來りたまへる如く、又た我等の心の底まで下つて之れに生れ、愛の火を以て之れを燃したまはん事を願ひ、以後は如何なる場合にも、生死

とも始終聖意に適はん事のみを、專ら考へ度との望を献げねばならぬ。

司祭が主禱文を唱ふる時、淺ましき我等も、之れに祈禱を添え、望の熱心を倍にして、最も要する所の恩寵を賜はらん事を、神に頻に願はねばならぬ。

使徒の書翰や福音を讀まれる時には、心の中に神に願ふて、其の尊き語を能く覺り、實際の生活

の中に、身を之れに從はせん爲め、知識を開き、聖寵を賜はらん事を、祈らねばならぬ。

第二の部、即ち奉献の時より、聖體拜領の時まで、心の中に凡ての、被造物、及び自己を解脫して、神の思召に身を委ぬる爲め、自己を悉く神に献げねばならぬ。

奉擧の時、基督の血肉と神性とを慎んで拜禮し斯く麵包と葡萄酒との形色の中に隱れたまふを見

て、愛情に充たされて斯く十字架上に結びたまへる尊き身を、忝なくも日々持來りたまふを深く感謝し、ガルバリヨに於て、御自身を天父に献げたまひし時の目的と一致して、其の奉献に、己が奉献を合さねばならぬ。

司祭が聖體の秘蹟を授る時、我等は少くとも精神的に之れを拜領し、心の門を被造物に閉ぢ、之れを基督に開いて、專ら其の愛の火を以て燃され

ん事を、願はねばならぬ。

終に第三部に於て、司祭に心を合せ、拜領後文を實際に唱ふる時には、我等は心の中に、夫れと等しき惠を、一心に願はねばならぬ。

第二十八　聖體の秘蹟の拜領

聖體拜領は何所までも、聖寵を增すに決つたものであるが、之れを以て聖寵の增すを戴くには、最も好き覺悟をせねばならぬ、而して此の覺

悟を、相當にする事は、自己では能はざるにより、極めて熱心に、聖會と共に、斯く神に祈らねばならぬ、主よ希くは我等の心を訪問し、專ら之れを清めて、聖子耶蘇基督の之れに下りたまふ時、其の聖意に適ふ住所と成る事を、得せしめたまへ」と。

然るに神が我等に好き覺悟を爲さしめん爲め、賜はる所の聖寵に、出來る丈け協力するには、先

づ耶蘇基督が、聖體の尊き秘蹟を定めたまふ時の目的を考へねばならぬ、直に御苦難の時、我等に現したまふた愛を、專ら思はせる爲めであると認むれば、尙ほ何の爲めに、其の愛を思はせやうとしたまふのであるかと云ふ事を探らねばならぬ。是れは勿論我等をして、愛と從順とを起さしむる爲めであるから、之れを認めて專ら神を愛し、神に從順ならんとする望と意思とを起せば、最も

好き覺悟になるのである。加ふるに今までは、神を愛せず、神に從順ならざるのみならず、却て最も愛深き父に、非常に反いたのを悔む事を、示さねばならぬ。

聖體を拜領する時まで、覺悟する爲めの望と心組は、略ぼ夫れであるが、拜領の時きたらば、信仰を振起さしめ、麵包の形色の中に、愈よ世の罪を除きたまふ神の羔の、籠り在す事を堅く信じ、

深く之れを拜禮して、尙ほ萬一にも心に殘れる汚を、悉く洗ひ清めたまはん事を希望して、之れを拜領せねばならぬ。

拜領後耶蘇基督が、我等の胸に在す時、切に愛を以て、我が心を燃したまはん事を祈り、聖意に適はん爲めに要する所の、凡ての惠をも願はねばならぬ、終に耶蘇基督を天の父に獻げ、讃美の犧牲として、聖體の惠、贖の惠の中に示したまへ